

孤坂(愛宕山地内)

須賀川の坂 ①

市外から引越してきた人が「須賀川は坂の多いまちです」と言います。これは、須賀川の須賀とは川で囲まれた高台という意味で、名実ともに丘の上にあるまちだからです。今月号から、その坂について須賀川史談会副会長の永山倉造さんが執筆いたします。

この年、北畠顯家は陸奥守に任ぜられ、義良親王を奉じて多賀城に入り、陸奥国府を開いた。須賀川城主、二階堂行朝は奥州式、評定衆に任ぜられ多賀国府に入った。

須賀川城は、川に沿った台地であり、坂道が多いところから名付けられた名称である。

須賀川城の大手は町の南に当たり、奥州街道に沿い、松並木があるところから「並木坂」と呼ばれている。須賀川城下に入る各街道も坂が多い。

関街道(中畑・滑津街道)には鍋師坂、塩の道として知られる前田川の「かつ坂」は、十二軒坂から本町に通じている。いわき街道の「針の坂」、この旧道として中宿に通ずる「田村口の

坂」がある。

須賀川の搦手は「北町坂」で、岩瀬の渡しに通じている。

須賀川城の詰め城として有名な岩瀬山城(愛宕山)には「狐坂」、「北小屋坂」がある。

天正十七年(一六八九)、会津芦名氏を滅ぼした伊達政宗が須賀川城に攻め入る戦いの場となった「大黒石の坂」や「あまのべの坂(雨呼り口の坂)」などがある。あまのべの坂は、奈良時代からの歴史を見つめて今日に至っている。

坂の名は、その大小にかかわらず昔からのいわれがあるものである。その「坂」について今月からしばらくの間お付き合いいただければ幸いである。

(永山倉造)



本町・東北電力付近

須賀川の坂

②

新町坂

奥羽道中を下って鏡石町から須賀川宿に入ると、街道は松並木の続く畑中の一本道となる。ここは、須賀川城の大手口に当たると、一里垣の松並木に沿い角畑から緩い坂道を登る。

この道は、御大宝山の西側を切り通して並木町の新町坂を登り、町の南の砦として築かれた枡形まで続いている。この枡形は、道の中央に下部を石で畳んだ土壇が、道をふさぐ格好で作

られている。

この町(新町)の北端東側に道祖神(黒門東の木立ちに囲まれた堂守がそれであったと思われる)が祭られ、三月二十三日が祝日である。道はここから下り坂となり、本町の黒門(現在の東北電力須賀川営業所前)に至る。黒門は北の新町坂にもある。この番屋には番屋人が常駐していて、明け六つ(午前六時)と暮れ六つ(午後六時)に扉を開閉した。

南の黒門では、朝日稻荷神社中の牛頭天王の夏祭り(きゅうり天王祭り)のとき、仮殿を建て、神興渡御がにぎやかに行われていた。

(永山倉造)



須賀川の坂

③

北新町坂

しんちよう

須賀川宿への北の入り口が「北新町坂」である。

奥羽街道を二本松から須賀川に入るには、必ずこの坂を通らなければならなかった。

まちの入り口には北の黒門があった。南の黒門と同じく番屋には番屋人が常駐していて、明け六つ（午前六時）と暮れ六つ（午後六時）には、扉を開閉した。この時間以外にまちに入るためには、抜け道であったと言われていた不動坂を通らなければな

らなかったが、実際には容易に通ることができなかったという。その後、現在までこの道は、市内の北部に住んでいる中学生が、第二中学校への通学路として利用していた。しかし、今では中宿新橋の架け替えによって、旧中宿橋（木橋）が取り壊され、利用できなくなった。

ところで、北新町坂まで行くには釈迦堂川を渡らなければならなかった。それが奥羽街道の渡し場、「釈迦堂の渡し」である。ここは、渡し場の守護のために、お釈迦様を祭ったと伝えられている。この渡しから南に向けて坂道を登りつめると、黒門に通じているのである。

（永山倉造）



愛宕山の北側に
ある妻恋坂

須賀川の坂 ④

妻恋坂

日本が第二次世界大戦（大東亜戦争）に敗れた昭和二十年代、結核が日本中にまんえんした。市内芦田塚にある国立福島療養所には数百人に及ぶ病人が入院していた。この病気は亡国病ともいわれ、これを防ぐため、病院では病人を外出禁止にし家族との面会も面会室以外ではできなかつた。しかし、脱柵道路と呼ばれる水田のあぜ道が抜け道となっていた。

面会を終わった妻や兄弟など

は、この抜け道を通り、愛宕山に通ずる坂の上で別れたという。この坂道（妻恋坂）は、須賀川駅へ通ずる近道でもあった。

入院していた人々は肉親が恋しくなると、この坂に来たという。坂に立つと、阿多多羅山（安達太良山）が見える。当時の俳句がある。

雪降りぬ淋しいときに見る
山に
別るべき坂なり帰燕しきり
なり

智恵子抄の山である。高村光太郎が、東京には空が無い……阿多多羅山の上に毎日出ている青い空が智恵子のほんとうの空だという。
（永山倉造）



須賀川西側に
大黒坂の面影を残す

須賀川の坂

⑤

大黒坂

日本の合戦史上例を見ない玉砕戦は、天正十七年十月二十日の正午に始まった。

大黒石の虎口を守った岩瀬東部衆三百騎と佐竹軍二百騎の計五百騎は、須賀川城本丸の落城により孤立してしまった。

この戦乱の中で、うんかのごとき伊達の大軍の中に鎧あぶみをけ立てて攻め込んだ二人の若武者があった。その雄姿は伊達政宗の目にとまり、「殺すには惜しい、捕らえよ」と家来の田村月齋げっさいに

命じた。政宗は、家来とともに攻めて間もなく生け捕り、二人に「私の家来になれ」と勧めるが、このうちの一人、大波は従わず逃れた。政宗は、「主君のために逃れる者は追うな」とそのままにした。昼八ツ時（午後二時）政宗は、八幡崎城の西と東の虎口に向かって総攻撃をかけた。死に物狂いに戦った須賀川衆は、一人一人討たれて、最後の一人が、討たれたのは申さるの下一刻（午後五時）である。

この戦いの有り様を、伊達家治家記録に「本城が落城した後まで任務を守り、戦死すること実に奇代の事なりと皆嘆美たんびすと」

（永山倉造）



須賀川の坂

⑥

鍋転ばし坂なべころ(庚申坂)

転ばし、または庚申坂と呼ばれている坂である。

今では、アスファルトの階段になっているが、当時はかなり急こう配の坂であったことがしのばれる。

春日病院の方から下ると右側に急カーブとなる。その右手に大きなけやきの木があり、そのもとに庚申塚がある。庚申坂の名は、この塚から付けられたものだろう。

明治三十年の須賀川町勧業綴によれば、道場町(東町)に内藤欣三郎経営による鍋物工場があった。内藤家は、江戸時代後

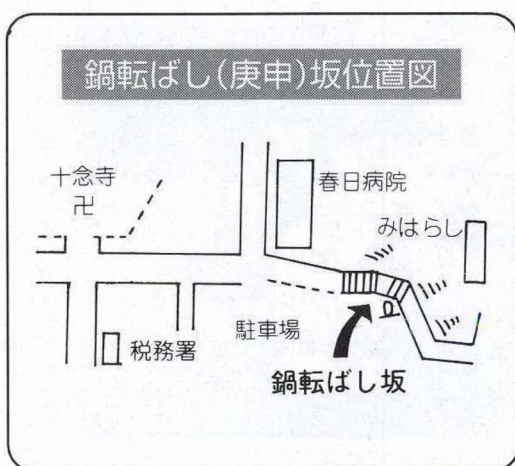
東町の十念寺前の道を、およそ百以東に進むと、春日病院の

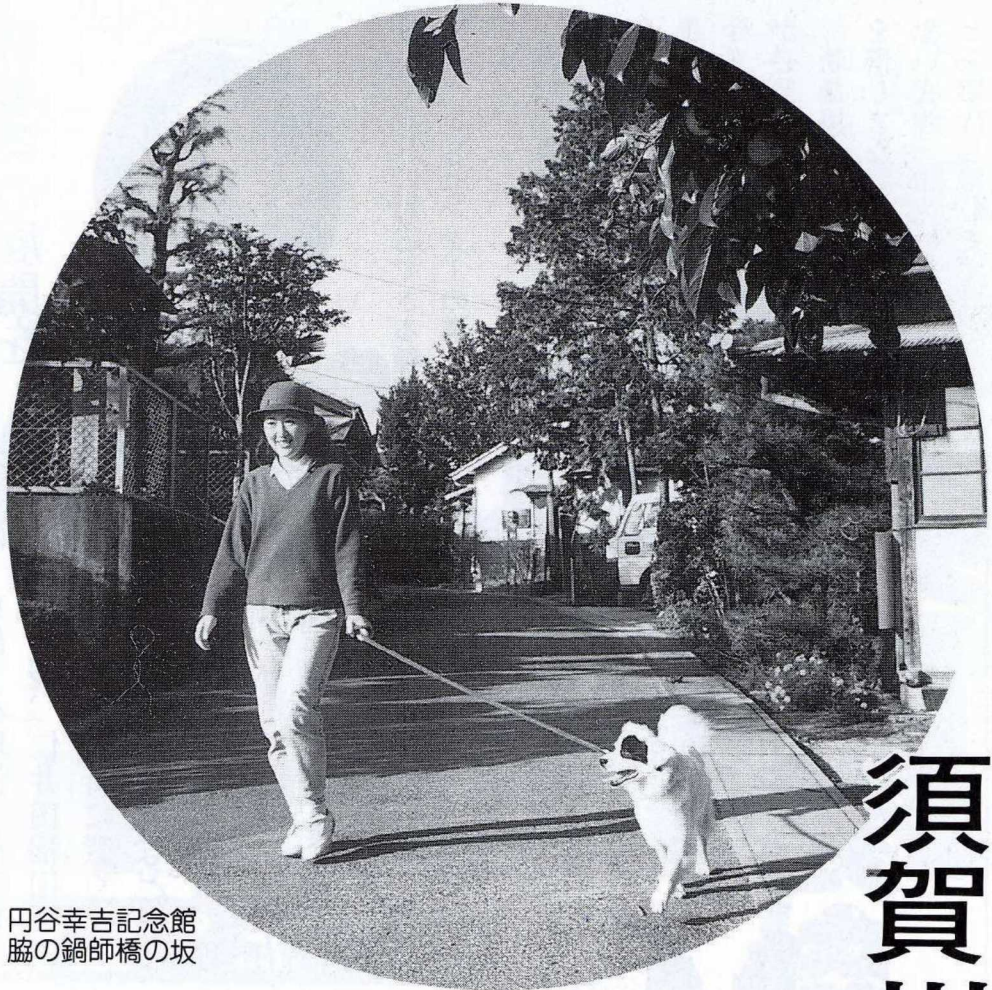
角に出る。そこから、みはらし旅館へ下る坂がある。これが鍋

期白河藩北郷須賀川代官の家柄であったが、明治時代になると、それまで白河藩の殿様や重臣の迎賓館として使っていた「御茶屋」を取り壊して、鍋物工場を経営した。

鍋転ばしの地名は、鍋や鉄瓶の不良品を坂の下に捨てたところから、その名が付いたと伝えられている。

永山倉造





円谷幸吉記念館
脇の鍋師橋の坂

須賀川の坂

⑦

鍋師橋の坂

と、やがて下り坂になる。この坂の手前から左に下がる坂がある。これが鍋師橋の坂である。地元では、「なめづ橋」と呼んでいる。

今では、道路も舗装になり、緩やかな坂だけが当時の面影を残している。

この坂は、中世大名二階堂家の居城、須賀川城辰巳の虎口こうでもあり、橋の所に鋳物屋があったので、この名が付いたという。

古代の国道とされる「東山道」は、白河の古関せきわくから関和久遺跡を通り、滑津・中跡から鏡石町の成田、そして須賀川の広町へ

と続く。ここには、県指定重要文化財の「石造双式阿弥陀三尊来迎供養塔」がある。

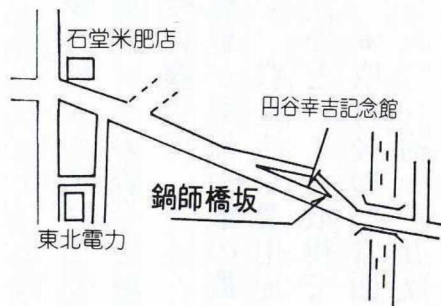
鍋師橋坂の中央、右手には昭和三十九年十月、東京オリンピックのマルソンで第三位に入った円谷幸吉選手の記念館がある。陸上競技で唯一の日の丸を揚げた不滅の栄光が、今でも私のまぶたに浮かんでくる。

永山倉造

市の中心部から旧国道を南に進み、大町の石堂米肥店の角を

左に曲がると、六軒団地方面へ入る。さらに五百メートルぐらい進む

鍋師橋の坂位置図



須賀川の坂 ⑧



道場下がり
と藤井下がり
の交差点から

三下がり

に「坂」の名が付けられていた。

町の中心部から東へ下がった地域（池上町）を、「下がり」と呼んでおり、当時の風情が今に語り継がれている。この地域に、「三下がり」と呼ばれている所が坂として残っている。

まず、「道場下がり」の坂である。時宗金徳寺の踊り念仏衆の道場に由来するところからこの名が付けられたという。現在の十念寺さん西側からえび屋さんの西側まで通じている。

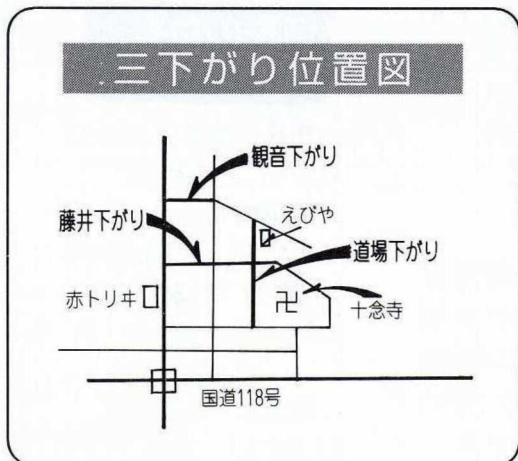
次に、「藤井下がり」の坂である。中町庄屋、藤井家屋敷（現在の青果大いさん）の脇を通っ

ていた坂がそうである。

最後の坂が「観音下がり」である。北町密蔵院（現在の田村獣医さん）わきの坂で、本尊観世音に由来するところから、この坂の名が付けられている。

当時から、これら「下がり」といわれていた坂を下がると、なぜか須賀川の花柳街に行きついたのである。

永山倉造



須賀川は、昔から馬の背町といわれ、特に、市街地から東側

は起伏が多く、坂も多い所である。そのため、それぞれ